

報



會

會 岳 山 本 日

83

月 一 年 四 十 和 昭

支那事變と

登山限界

冠 松次郎

支那事變と登山の限界について
私見を述べたいと思ひ、會報の端
を拜借したのである。

吾人は我が登山界の現状を見ると
き、遺憾ながらその行き詰りを感じ
ざるを得ない。内地の山岳は、その
頂より溪の隈に至るまで、殆ど總て
が登山人の足痕を印し、處女境、原
始境としての雄大な風景は、年と
共に縮小せられつゝある。

海外へ、亞細亞大陸へと、その大
自然、大風景に強き憧れを持つ我が
アルピニストは、今や、遠く支那奥
地、中央亞細亞の空を望んで脾肉の
嘆を抱いてゐる。

勿論我が領土内に於ても、自然美
を採求する餘地は充分ある。又幾度
訪れるもその豊麗なる趣致を有する
景觀には、吾人に新たな感興を興
へるものも甚だ多い。併しそれにも
拘らず吾人は矢張り行き詰りを感じ
るものである。

我が國の人口が飛躍的に増加し、
その配置に行き詰りを感じ、海外に
向つての發展を促しつゝある如く、
我が登山人の原始境に對する渴望は
最早内地の行き詰まれる山岳登行の
みにては満たされない。もつとずつ
と廣大な世界へ、そして更に原始的

の大風景に接したい。さう云ふ慾望
は抑壓出来ない程若きアルピニスト
の胸に澎湃としてゐる。この數年來
競つて海外に雄飛せんとする計畫の
續出せる所以も亦實にこゝに存する
のである。

支那事變は云ふまでもなく大東亞
建設の聖域であるが、同時に又、大
和民族の鬱勃たる發展力が、亞細亞
大陸に向つて膨張せるものなること
は否めない。

大和民族の推進する處、吾人山岳
人も亦その時潮に先驅して、支那奥
地の探検に身を以て處するの覺悟あ
るべきではないか。今次事變を以て
支那大陸奥地の高山へ、更に大陸を
縦斷して中央亞細亞、ヒマラヤに通
ずる一大登山ルートの端緒を啓開す
るものと思ふは果して盲想であらう
か。

續つて今日の世界山岳界の大勢を
見るに、ヨオロツパアルプスは勿論
コウカサス、アンデスの高峯の多く
は既に登攀せられ、今や世界岳人の
興味は、等しく東洋の聖地ヒマラヤ
に向つて集中されてゐる。

而して今日迄の狀態に於ては、ヒ
マラヤ行は悉く印度よりする。併も
その印度は遺憾ながら英領であり、
従つて登山者に非常なる制限を餘儀
なくせられ、到底自由にヒマラヤの
登山慾を満すことは出来ない。吾人
は東洋最高の聖地が白人によつて支
配せられ、指を喰へてその聖地を遠
望しつゝある現状を以て、甚だ心外

とする者であるが、少なくとも今日
の狀態にては如何とも致し難い。
然るに今次事變を契機として、端
なくも支那奥地よりする中央亞細亞
の探検に曙光を仰ぎ得たるは何たる
幸福であるか。

勿論この探検界未曾有の開拓事業
は、到底短日月のよくする處ではな
い。併しながら皇威の滲透するに従
つて登山の限界を擴大し、未見豪壯
なる大風景が行く行く展開さるゝ愉
悦の、常にこれに伴ふことは期して
待つべきである。

支那大陸よりするヒマラヤの完登
は、恐らく吾人の生存中には期し難
く、子孫、曾孫に至つて僅かにその
目的を達すことであらう。併し前述
せる如く吾人と雖も猶その遠征の歴
程に於ける探検の成果を得て喜ぶ幸
福は得らるゝ。吾人自らも亦その光
輝ある遠征に参加してこの老骨を捧
ぐるを辭さないものである。

『黄河遠く上る白雲の間、一片の
孤城萬仞の山』。揚子江、黄河の峡谷
を溯りその雄渾なる風物に接し、更
にその水源に達し廓寥無人の中央亞
細亞の大風景に征衣を振ふ日あるを
思ふとき、吾人は洵に感慨無量なる
ものがある。

想ふてこゝに至るとき、吾人は生
を日本國に享けたる生甲斐を感じる
世界興亡の跡を顧み、國を奪はれ、
國を追はれ、或は惡政の下に呻吟す
る無數無量の蒼生を思ふとき、上一
系の皇室を戴き、その光耀を負ふて

宇内を活躍することを得る吾人
大和民族は幸福なる國民と云はざる
を得ない。

『皇威八紘に輝く』吾人は悲しく
皇運の無窮を祈り、征戰將士の勞苦
に感泣する。而して最後に言はんと

主要目次

- ・支那事變と登山限界……………冠 松次郎……………一
- ・山岳語彙蒐集集について……………高橋文太郎……………二
- ・八幡製鐵所に於ける集團登山の近況……………橋本 三八……………三
- ・ヒマラヤ八千米級へ遠征隊を派遣するに到るまで……………吉坂 隆正……………四
- ・ノーマン・コリイ氏のアルバム……………島田 武時……………五
- ・高須茂氏の辨……………一九三三年の攻撃(六)……………吉澤 生……………六
- ◆圖書紹介◆……………七
- ◆「新スキー術」其他……………九
- ◆測量部地圖新版……………一〇
- ◆會員通信……………一一
- ◆會務報告……………一二

する。

眼を世界の登山界に放ち、今次の聖戰を生かせ。若きアルピニストよ
躍起せよ。而してやがて来るべき支
那大陸よりする中央亞細亞探検の征
戰に準備せよ。(丁)



山岳語彙蒐集

について

高橋文太郎

「山岳第三十三年第一號に所載された本會の事業の一つとしての山岳語彙の蒐集報告(第一)は會員並に地方諸氏の御援助によるものである。恐らくこの種、民間の言語現象に關心をもたれぬ方々は、貴重な紙面をさいてまで、發表したことに就き、餘り喜ばれないかも知れぬ。最近の「山岳」の内容は實に面白くなく、送本されると頁も切らずに、そのまゝ書棚に上げてしまふと云ふ聲にも接するが、之も一應尤もな事だと思ふ。同じ本會を構成する人々ですら斯くの如き所感をもつて居られる。まして、第三者が之を手取つて見た場合、山岳會老いたる哉と嘆息する向きの有るであらう事が想像される。兎角他人のやることに關して、文句をつけたがるのが、現時の世相面の

一つでもある。直接、登山に關係のない斯んな仕事を高い費用までかけて何うするのだと、意見の出るのも尤もである。

併し間接的に極めて重要な、吾國山岳文化に關する一つの事象の集成を企圖する此の種の事業に關心と理解をもたれる向きは、恐らく之らの報告者などの努力に感謝される事と思ふ。あらゆるスポーツ乃至は登山などを、時局の認識と結び付けて説かうとする文章も最近は屢々見受けるが、少し冷静に考へるならば、何も無理に時局精神を登山とか山に關する文化にまで結び付けて、考へずとも良いのではないかと思ふ。勿論登山をする者に山に關する文化を探らうとする人達にも、この時局の認識が無い譯ではないのだから、殊更に時局と登山やその他のスポーツとを結び付ける必要もなからうと思ふ。

一つの山岳語彙、特にその行動に關するものなどを探つて見れば、そこに明かに時代的な文化の推移や變遷がまざまざと映し出されてゐるのを見る事もできる。登山における山村人の行動とか言葉とか心意といふものは、時代の社會的影響を被ることは極めて微妙なるものがある。山案内人夫らの服装などが年を逐うて變り行くのは誰でも見聞してゐる所だ。ましてその登山における心意部面においては著しいものがあらう尙且つ、吾々登山者が山に出かける

氣持とか登山や山を考へる心意において、誰が時代の文化と違背すると云へやうか。如何なるロマンティストも亦如何なるリヤリストと雖も多かれ少かれ、それが社會生活を營んでゐる限りにおいて、その時代々々の社會的な動きの影響なしには有りえない譯である。それらの登山者を總體的に見れば尙この現象は顯著である。

斯ういふ社會生活の機構内における人間とその者の登山における行爲とか山に對する考へを吟味するとき明かにそこに時代的な推移と反映の過程を見るのである。登山における行爲も言葉も、時代と共に移り又その或るものは消え生れつゝある時、現在においてこの方面の語彙を蒐集しておく事の意義は重且つ大となる従つて、直接吾々のスポーツたる登山に關係がないからと云つて、この種の事業を一笑に附し、且つその印刷された結晶に對して見向きもしないと思ふのは、甚だ解せられぬ心理である。よしそれが自分個人の興味に即し無いからとの理由で、一時それを棚に上げてしまふのも良いが、永く山に登り深く山を知り且つ愛する人々が、この文化的方面への努力奉仕とかその結果に對して、何らの理解をもたないと思ふのは洵に解せぬ所である。

私がこの蒐集事業のお手傳ひをして一番もどかしと思つた事は、本會の直接關係においてその寄與者が

案外に少いことであつた。本會としては恐らくもつと第一義的に着手する可き仕事も多いであらう。併し一旦この必要が議題に上り且つその實行に移されたにも拘らず、對岸の火災として顧みられぬ事が多かつたのは、聊か物足りぬ感じがした。この事業は今後も出来るなら今少し發展させて見たいと思ふので、非禮を顧みず一言記した譯である。その資料の多くが集積されれば、實際的な意味合ひで應用の方法も有らうし、或は此の應用がうまく行かないとしても、その集積は決して無駄なものではない。本會が資料として出来るだけのものを集めておく事は、他の學術的な分野へ貢獻すること大なるものがある。之は恰度、自然科学の方面に携はる者が、雪質や雪崩それ自体を研究し或は山の地質構成を論じ、或は山の動植物を探究する場合と異なること遠くない。間接に登山者に益する所大いのである。

併し、例へば雪質や雪崩の研究にしても登山に關する範圍内といふか或は登山に必要なその研究が求められるので、それ以外に何ら専門的な攻究は要しない、即ち登山のための雪質、雪崩の研究で良いといふ意見もあらうが、一般の登山者各自が自然科學的な素養があるとは限らないのであるから、矢張り専門家によつて吾々は啓蒙され、然る後登山者独自の分野において、それを研究すべきであると解した方が良いやうに思ふ。

今この語彙整理の方法は一見極めて殺風景であるかも知れない。併し出来るだけ主觀を排した事象の記述としては先づ此の種の體裁によるより外はない。餘り趣味的な或は隨筆風な山の文章のみに興味を奪はれてゐるからこそ、最近の「山岳」の記事がつまらなく眼に映るのだと思ふ。私はもつと専門的な立場からの記述が出て差支へないと思ふ。登山の記録方面に現在においては或る限度が已むを得ず有りとするならば、こ

「山岳」原稿募集

第三十四年度第一號の「山岳」内容は大會事務報告にある通りであります。長短いづれでも結構です。原稿を御送り下さる様御願ひ申し上げます。本會員以外の方でも勿論結構であります。

この種の方面の記事がその代用とされることは決して無理もないことだ。私は寧ろ茲に内容の質の向上を考へたい。最近の「山岳」編輯者の勞苦にも併せて感謝の意を表したいのである。登山そのものの記事と登山や山に關する文化的又は學術的な記述は、並行して進んでいつて良いものと思ふ。

此の様な譯で、今後共、理解ある方々の蒐集報告を切に希ふ次第である。

八幡製鐵所に於ける集團登山の近況

橋 本 三 八

北九州重工業の大本山であり、日本軍需工業の原動力をなしてゐる八幡製鐵所従業員三萬數千人の體育、保健に就いては、産業職士の勞働力確保の上から、各種スポーツ設備が完備し、此の方面からも日本有数の競技團體を組織してゐる有様であるが、近時銃後の體育運動が主唱されるや、選手制スポーツから集團スポーツへと、新しい認識は、國策に順應するスポーツとしての徒歩運動が眞剣に考へられ、集團登山の奨励は全工場に向つて宣唱され、實踐されて來てゐる。

先般施行された國民精神總動員鍛鍊運動に於ては、ハイキングの實施を全工場に通達を以て命じてゐる程である。

その要項を見るに、先づ適當なハイキング指定地を定め、
「各工場ニ於テハ課又ハ掛ヲ單位トシテ本運動期間中適當ノ休業日ヲ利用シ従業員並ニ家族ヲシテ可成多數參加セシムル事」
そして期間中に實施したハイキング要項及び、參加人員數、所感を記した報告書の提出を命じてゐる。

小生も其運動に多少關係せし爲め終了後、その報告書の一覽を乞ひ、期間中實施されたハイキングの統計的なものを作製、此處に記して一覽

何等かの參考に供し、又工場スポーツとして集團登山として恐らく日本最大と言つていい參加人員を示した八幡製鐵所のハイキング運動の近況を報告することにしよう。

別表参照の事

所 感

(イ)團體運動の訓練、協同精神の養成、従業員間の融和の一助として好評、好成績。

(ロ)身體鍛鍊運動として登山は最もよろしき様なり、毎月一回實施すべく計畫中。

(ハ)加熱爐従業の爲め身心の疲労多く遠距離より近距離を歓迎せる如し。

(ニ)平素の疲労を見せず統制されたる團體として最後迄頑張りたるは全員良く精神を解したる如し。

(ホ)當工場は三交代にして多忙極に達し常に出勤多く居残、早出多ければ集團運動の催し甚だ困難なり。

(ハ)明日への活動の源泉を培ふに最適であつた。

以上の所感は百件近い報告書より代表的なものを抜粋したが、大多數は好成績にて今後とも繼續するといふもの多く、不成績とあるものも、參加人員の数字的不成績の事であつて、主旨に對しては不評なく、賛意を表してゐる。

此の運動後最近の實際状況を見るに、其儘繼續して集團的に登山せる者、分散して個人的に繼續せる者、その數は飛躍的に増加してゐる。

設計は日本山岳會の紹介にて瓜生氏に依頼、實地調査も終り設計書も完成してゐるが目下材料統制の關係等にて建設は一時停頓してゐるものゝ

を作つた事で、工場醫學上からも相當注目するゝものと思はれる。

— 編者註 — 登山には理論も大切であるがそれにも増して肝要なもの

當局に於ても十月中平尾臺ハイキングを主催し三百名を募集實行してゐる。今後とも時期を見て計畫の方針にてその計畫、指導等は製鐵所山岳會(日本山岳會加入)に依頼される。山岳會は従業員より成り會員三百名各工場に分散し、工場を單位とする前記ハイキングには指導の任に當つてゐる。

(A)コース、參加人員、徒歩行程

(要塞地帯内のため略圖及山地標高は省略する)

ハイキング地は最短八幡市内より最長約三十軒以内にある山地

コース 徒歩行程(軒) 參加人員數

△皿倉山を中心として 八—一五 三、〇九六名

△花尾山 〇—一四 一、一四二

△足立山 八—一〇 八六六

△養福寺貯水池 〇—一四 四八六

△菅生瀧 八—一二 二八二

△尺岳、福智山縦走 一二—一五 二六六

△脇田海岸 五 二〇〇

△千石峽—笠城山 一四 一九九

△金比羅山 八 一四七

△恒見海岸を中心として 一七 一六五

△平尾臺 一二 一二九

△香春岳 八—一〇 二一

△蒲生社 八—一〇 二〇

△九重山 二日間(縣外) 一〇

△印は登山を主とするもの

計 七、三六〇

不明 三六二

(B)二十三日間に行

動せる人員數

七月廿日 一七三名

七月卅一日 二一七

八月四日 一三〇

八月五日 三二

八月六日 二二

八月七日 一〇

八月八日 一、六三五

八月九日 三〇〇

八月十日 一三五

八月十一日 八七一

八月十二日 七二

八月十三日 三〇

八月十四日 二一八

八月十五日 一五〇

八月十六日 一、六五〇

八月十七日 九九

八月十八日 三五

八月十九日 二六

八月廿日 二〇

八月廿一日 二九

八月廿二日 二二

八月廿三日 二〇

八月廿四日 二六

八月廿五日 二〇

八月廿六日 二九

八月廿七日 二二

八月廿八日 二〇

八月廿九日 二六

八月三十日 二〇

八月三十一日 二九

より、此の種の御報告が載れば、他工場の參考となる許りでなく吾々にとつても亦啓發せらるゝ所が少くないと思ふ。振つて御投稿あらん事を希望する。

はれます。併しエベレスト以外では冬期氷や雪の状態もよく登攀の時期としては一應考慮の餘地はありません。高度馴化は一萬六千呎のベースキャンプあたりから始め一日千呎位行つては四五日休む様にして行きます。又一度馴化しても又戻る人もありますから二日に一度は血液検査をするといふでせう。

寂寞を慰める、道具は必ず用意して行く事です。ラヂオは殆んど聴取出来ない様ですから蓄音機を持つて行くといふでせう。ラヂオで面白い事はたまにニュースが入つて、それがまたよくオックスフォード對ケンブリッヂのボートレースの實況放送であつたりして、兩大學の優劣で議論の花を咲かせたりしました。

最後に燃料は航空用ガソリン、所謂ケルビンオイルですが、極く高い所ではアルコール(それも非常に純粋な)以外は駄目の様です。

大體モリス氏の言をそのまま書きつけて見ました。この後で更にエベレスト遠征のものについて説明や幻燈があり、シブトンとスマイスが時々喧嘩をする事やその他表向きには知られぬ内輪話も出て實に愉快な一夜を過し得ました。

(昭和十三年十一月廿五日)

前號に編者が御報告したものと同一ものであるが、モリス氏講演の大半をよく説明して居られたので重複を承知で掲載した。御了承を乞ふ。

J. Norman Collie 氏の アルバム

島 田 武 時

この年か、日本人の友人に贈られた J. Norman Collie 氏の名著 *Climbing on the Himalaya and other Mountain Ranges* と氏の自作にかゝるアルバムが古びた姿となつて私の手に流れこんで来た。

兩方ともに *To Prof. —, with Kind regard; from J. Norman Collie* の署名がいつて居る。

今日既にヒマラヤの有数の文獻となつて居る著書については私ごときなにも云ふことは無いがアルバムを山岳會の書架に獻じて誰れの眼にもふれないと困るから一寸紹介させて頂きたい。

アルバムは四十八枚の寫眞が貼られその内譯は

Scotland 15枚 England 5枚

Ireland 5枚 Wales 2枚

Alps 8枚 Canada 6枚

Norway 5枚

風景と別にカナダあたりの森林帯のテント場のコリー氏の青年時代の肖像が二枚ある。

各寫眞には氏の説明が鉛筆で認めてある。

惜しいことには氏がマンメリーと行を共にしたヒマラヤの寫眞は一枚もない、氏がカナダを訪ふたのはヒマラヤ遠征の後だから一枚もないの

はいさゝか淋しい。

四十八枚のうち氏の著書の中に挿入されたのは著書の巻頭の *A Story Sunset (from the Matterhorn)* 一四八頁の *A Cravasse on Mont Blanc* 一六六頁の *The Freshfield Glacier* の三枚である。

寫眞は皆な幾分變色して居るが私達が祖父母の若い頃のピカ／＼光る薄い紅茶色の姿を思ひ出すもので四十年前のものと思へば山岳會の「高山深谷」を眺める感慨はある。

かうして永年の後になつてみると密着印畫は變色して了ふのを見ると書籍に挿入の寫眞はなるべく良い印刷のものが欲しいと思ふ。最近英國に於て發行されるものには餘り良いものはない。書籍に對する氣持の變化かも知れないが、古い書籍は装幀にしる挿入の寫眞にしる大變立派なものが多い。

コリー氏の著書のコロタイプも仲々良く出来て居るが最近のテイルマン、シブトン等の著書のグラビヤはひどいものである。同じグラビヤにしても獨逸あたりのものもつと良い。この著書、アルバムは贈呈を受けた人はコリー氏とは親交あつたにしろ山登りに於けるものではないらしく随分粗末に扱はれ著書の如きはアンカウトそのまゝであつた。

所謂寫眞術の参考にはならないがなるべく多くの人々にみてもらいたいと思ひ、こゝに山岳會に寄贈するにあつて紹介する次第である。

高須茂氏の辯

I. V 生

前々號に藤島氏が書いた高須氏の著書の紹介に對し高須氏は東京山旅俱樂部月報獨立樹六八號に「*「荒蘭之支」*といふ恐ろしく難しい標題の許に氏自身の感想を述べられてゐる。私は之を読んで何とも批評の言葉が出て来なかつたが、兎に角一つの參考資料とはなつたので、茲にその全文を無断で轉載させて戴く事にした。

荒蘭之支

最近、日本山岳會の月報で藤島さんの「*岩・氷・ランプ*」評を読んで大變面白かつた。一刀兩斷といふ調子でやつつけられたので、やつつけられながらもなかなか氣持がよかつたが、もう一人の僕が傍にゐて、僕の横顔を突つきながらクスクス笑つてゐるのには弱つた。

いつか矢島祐利氏がジョン・チンダルの譯で中學生以下のやうにこきおろされてゐるのを讀んだ時、日本山岳會といふのは大變な會だと思つてイヤな氣がしたし、この間の高橋文太郎氏を目茶々々にやつつけてゐるのを見た時もうかなあと思つたが、さて自分がやられてみると、これはまた滑稽さがさがるやうにいゝものである。もつとも一面では藤島さんはいつまでたつてもトツチヤン小僧だなあと思つたが、またかういふ人もゐていゝだらうと思つた。

しかし、水の中に水素があるやうに誤譯があつたり、わけのわからないところはグリセイドでもぶつとばすやうにやつたり(初版後記)まだまだ不完全なものでしかない(再版後記)ものを本にしてゐる僕の氣持が判らないやうでは困ると思つた。誤譯なんかいい方がいゝのは當然で言ふまでもないことだが、全體としてジャン・コストといふ少年を傳へ得ればそれでいゝといふのが、この恐るべき譯者の氣持で、別に讀者をなめてゐるわけでもないでもない、なめてゐるといへば原作者をなめてゐるのかもしれない。金を借りても返さなくともよい友達にしかコストを思つてゐないのである。急所を突かれると怒る人が多いし、誤譯を恐れてゐる人には藤島さんの批評は腹が立つかもしれないが、僕にはたゞ景氣のいゝタンカをきいたやうに愉快になれるし、クスクス笑ひたくなる氣持もあるのである。

誤譯のない立派な山岳書がどしどし出てくれば、僕などは非常に有難いので、これは何も僕ばかりの氣持ではなく、大島亮吉氏の流れをくんで山岳書を読むために語學を學んだやうな者全部の氣持だらう。日本山岳會のお偉方が誤譯を指摘しつづけるのも非常に結構だから、大いによつてもらひたいが、それだけではつまらないといふことにも、もう氣がついていゝだらうと思ふが如何。

一九三三年の攻撃(六)

—エヴェレスト—

“Camp Six”より

吉澤生

間もなく私はエリックと訣れた地点の下へやつて来た、然し上を見てエリックの姿は見えなかつた。茲で私は百呎許り登つて行きに採つたルートを辿るか、或は此の儘平行に眞直キャンプへ戻るか、いづれか一つの道を選ぶ必要に迫られたのである。然しこんな所で上の道へ出るといふのは全くまづい。身体は餘りに疲れ足は鉛の様に重くなつて了つた、此の足でも降りや或は横掻きは案外樂であらう、が然し無理をしなれば上へ引摺り上げるといふ事には自信がなかつた。嫌が應でも誘惑され様としたのはノルトンとソマヴェルのルートに従つて黄帯を斜めに降る事であつた。之は、CⅥへ行くには、幾つも傾いた棚を横切らなければならぬ長い嫌なトラヴァースよりも、餘程樂なルートであつた。二時間か三時間の裡にはCⅤへも行けるであらうし、もつと降つてCⅣの、氣樂なアークティックテントにも這入れるかも知れなかつた。然し都合の悪い事にはエリックがCⅦに私の歸りを待つてゐるのだ、だから私が戻らなければ當然私に事故が起つたと思ふに違ひない。

最初は簡単な登りであつたが直ぐ難しくなつて来た。CⅦから第一段階の基部まで行つてゐる容易しい岩板とはうつて變つて階段状になつて居り、段の所は外方に向いた棚、棚と棚の間は險しい小さな壁となつてゐた。而も之等の棚は長くは續かず一つが終るとそれを下りて他へ移るといふ具合になつてゐる。然しCⅦの位置より下る様な事もなくどうにか進む事は出来た。

此のルートはウインとウエジャーが氷斧を發見した少し下の棚を横切つてゐたが私はマロリーとアーヴン二人の歩いたらしい跡は何も見出す事は出来なかつた。だが然し私はあの可なり廣い緩傾斜の雪面、帶の下の小石、破片岩杯を蹴下ろして、若し氷斧の位置が確かに二人の滑落の現場であるともし

でも、あそこで彼等は停る事が出来ただらうと考へたのを憶ひ出す。

法もない現象に眼を瞠つたのは、丁度こういふ一つの休憩中の出来事で

「北東の肩」の上方に眼をやつてゐる時であつた、私は空中に二つの黒いものを見出した

North Face of Everest



棚には可なり廣いのもあつたので私はチョイ／＼休んだ。私がある途

あつた。丁度私の正面の位置に来てゐた

- 本圖は一九二四年ノエル大尉がベイスキャンプ(一六、五〇〇呎)から撮つた望遠寫眞を基にして描いたもので、エヴェレストの北面及上方キャンプ並びに一九三三年に探られたルートを示す。山頂と撮影地點との距離は約十七・六呎、「北東の肩」とはそれより約〇・八呎近い。圖にある夫々の記號は左記の如し。
- (A) CⅤ(二五、五〇〇呎)の位置、手前の山の後に隠る。
 - (B) 「北東の肩」(二七、五一〇呎)
 - (C) 一九二四年のCⅦ(二六、七〇〇呎)
 - (D) CⅥへのルート
 - (E) CⅥよりの歸路
 - (F) CⅦ(二七、四〇〇呎)
 - (G) 氷斧が山稜に出でたる地點
 - (H) 氷斧の發見せられたる地點
 - (I) 野營地となり得る場所
 - (J) 第一段階(基部は二七、九五〇呎)
 - (K) Shipmanの達した最高地點
 - (L) 第二段階(基部は二八、一四〇呎)
 - (M) Smytheの歸路
 - (N) グレイト・クールワール
 - (O) Wyn Harris, Wager及びSmytheが到達せる地點(二八、〇〇〇呎)
 - (P) 支溝
 - (Q) 山頂への可能ルート
 - (S) 頂上(二九、〇〇〇呎)
- 尙 Spenderの實測になる此の附近の二萬分の一の地圖も御眼にかけたいと思つたが、此の方は後の機會に譲る。

嘴に似た凸起があつた。然し最も凄く感じたのは、恰もある恐ろしい生



紹介書圖

圖説

新スキー術

馬場忠三郎著
三省堂刊行
定價二圓卅錢

目次

着脱、平地行進、方向變換、登行、雪質とワックス、直滑降、斜滑降、滑出、顛倒と起立、制動滑降、制動廻轉、アウフアング・シュテム・ボーゲン、クリスチャニア、平地滑走、踏み換へ、跳躍廻轉、飛躍、滑降廻轉競技、スキー講習、季節外のスキー、歐洲スキー旅の追想、スキー寫眞の撮影に就て

以上二十二項

三省堂から寄贈をうけて久振りにスキーの本といふものを讀んで見た。スキーを下駄と心得（之は穿き

こなすといふ意味では勿論ない）或は輪漕の代用品位にしか考へてゐなかつた私は、スキーの技術杯には餘り重きを置いてゐなかつた、登りにはシールを着け、降りにはパラフィンを焼付けて杖を使ったシュテム・ボーゲンで確實に降りて来る、それで充分だと心得てゐたからである。スキーの高等技術杯はレイサーだけに必要なものであつて重い荷を背負つて山を目指す人間には必要などとは云はなくとも大した關心を寄せざる程のものでもないと思つて居た事は事實である。ワックスなんか腹を減らしてハア／＼云ひ乍ら塗りつけて行くが、仲々レツテル通りになつて呉れないので、最後には癢に觸つて家傳のバラでデユウ／＼と焼付けて了ふ。こんな手合にかゝつてはいくら立派な本も、親切なワックスの手引も全く猫に小判である。

だが三、四年前の正月に黒澤峠を越えて冷澤の小屋から長ザクを登つて冷ノ池の小屋へ行つた時、國境線へ出る最後の急斜面の所で、僅か五、六間しかない長大な急峻な窪みを實に鮮かなボーゲンを描いて滑降して行つたシュテム・ボーゲンを見付け、感嘆之を久ふした事があつた。之は二日許り前に小屋から降つたスキーの大家竹節君のシュテム・ボーゲンである事瞭らかであつた。その時程私にレーズ・スキーといふものと山岳スキーといふものが、全然別箇のものであり得ないといふ事實を如實に悟らしめ

命を有するが如く、内外に動く脈搏の様なものをうつてゐる事であつた。一つの興味ある點はそれが私自身の心臓の鼓動よりずつと遅い動悸を確りとうつてゐて、後に一つの暗示として述べた通り、それは視覺上の幻覺らしかつたが、見掛けの上の動悸は私自身の脈搏率と同時的のものであつた事は確かである。

最初風船だと思ひ込んだ後の私の頭は、まだ普通に働いてゐる様だつた。私は之は面白い、私の幻覺から來てゐる現象に違ひないのだから一つ自分でメンタルテストをやつて見やうと考へた。仍でまづ遠方を看て見た。當の相手は私の眼と一緒に動かなかつた。然し再び「北東の肩」に眼を移すと風船は相變らず其處でフワ／＼と浮いてゐる。私は又遠くを見て今度は一層正確なテストを行ふ爲めに多くの峯や溪や氷河の名前を思ひ浮べた、それでもチヨイオユやギヤチュン・カン、ブモリ或はロンプ氷河はその名を擧げるに何の難作もなかつた。然しその怪物に再び眼を戻して見ると矢張りチヤンと元の通りの場所にゐるのだ。

此れ以上何かやつて見た所で何も得る所は無き相だし、果てしのない岩板にももうんざりしてゐたので、私はCⅥへ戻つて行く事にした。丁度其時霧が出て來て「北東の肩」を隠へて行かふとしてゐる所だつた。怪物は次第に其後へ隠れて行つた。間もなくそれは薄い影の様になり、霧が濃くなるに従つて全く視界から消え去つて了つた。此霧はホンの五六秒で消えた、再び怪物にお眼にかゝれる事と思つたがもうそこには居なかつた、現はれた時も不可思議だつたが消え際も亦神秘的であつた。

それは視覺上の迷ひだつたらうか又は層氣樓だつたのだらうか。私の位置は約二七、六〇〇呎の高さで、面白い事に、怪物は北東稜の數度上にあつて、一九二四年のCⅥと「北東の肩」の背稜とのほゞ中間頃に浮いてゐた。これは怪物の高さが約二七、二〇〇呎となる事を意味し、それと私とを結ぶ線は空中に終るのでなく、雲と山に衝き當る事になるのである。従つて想像力といふものが霧や山や影といふ不思議な影響を廓大したのだといふ事は出来るかも知れないが、兎に角、妙な氣味の悪い經驗ではあつた。

最初の霧は後から來るものゝ前驅だつた、後から／＼と霧は急速に流動し見覺えある眼じるしをドン／＼隠して行つた。霧の中で、廣漠たる岩板の上をCⅥに歸へる事は中々容易な業ではない、それにテントが見えなかつたので餘計心配になつて來た。だが幸ひな事に北東山稜上にあつて丁度CⅥの眞上に當る二つの岩塔が見え隠れしてゐた。

砂岩の岩板は所々滑り易い石英岩の帯で横切られてゐる、それが如何に滑り易いかといふ事は、急な小壁から身體を下ろして外傾きの石英岩の棚に下りた時初めてわかつた。それは砂岩の棚より一層滑らかで連も靴の鉄だけに身をゆだねる氣にはなれなかつた。こうなるともう砂岩の棚に逃げる以外に方法がなかつたので、その方へ登つたが、僅か二十呎の登攀にも不拘、此處で私は自分が如何に疲れてゐるかといふのを悟る事が出來た。

間もなく二つの岩塔は直ぐ頭の上に來たので立停つてテントは何處かと半ば豫期しながら周圍に眼を配つた。然しまだ見當らなかつた、私は一體その上に居るのだらうか、それとも下に居るのだらうか。探るべきルートが間違つて居たのだらうか。私の周囲は外向きに傾下した茫漠たる岩板のラビリンスである。時々氷の様に冷い霧が大空から湧いて來て、宛で魔物の如く北東の山稜に這ひ上つて行く、そこへ來るとキレレグレになつて、南西の斷崖から絶え間なく縦横に湧り騰つて來る水蒸氣に突入して、一緒になつて了ふ。

五、六歩進んで見た、とそこには

見覺えのある岩がある。突然、私は浅い緩く傾斜した雪の詰つたガリイに出た。その雪には足跡があつた。それはテントの直ぐ上にあるガリイであつたのだ。次の瞬間、その片隅に小じんまりと置かれてゐるテントを見付け出した。ハテナ、こんな所が、と思つた、だが之で助かつたんだ。私は喜びの噓れた奇聲をあげてころがる様に行つた。（續く）

た事はなかつたのである。荷は重くとも、ヨリ速く確實に、之はどうあつても山岳スキーには不可欠のものでなければならぬ。此の意味に於て吾々はもつととレス・スキーヤーのいふ事に耳を傾けなければならぬと思ふ。

今度、明大山岳部のOBにして吾平に根を張つてゐる馬場氏が「新スキー術」と題して一書を公にされた。馬場氏は本来のレーサーではない、明大の馬場、遠藤と云へば今から十四、五年前の神河内では相當轟きわたつた名前である。斯ういふ點が私をして氏のスキー書に特別の好意といふか關心を持たしめた一つの原因であつたとも云へう。山男が、山男のものをしたスキー書に特に心を惹かれるといふ事も洵に當然の歸結と云はなければならぬ。

扱て、最近のスキーを持つ程の者でテンポ・シユウングを口にせぬ人は殆どない、猫も杓子もテンポ・シユウングである。斯ういふ私も勿論その猫か杓子のいづれかに屬する一員ではあるが、口こそそれその實質がなんであるかは瞭り知らないものである。又誰に訊いても其のいふ所が違ふので素人の私にはその内のどれが正真正正銘のものであるのか之を掴む事に苦しんでゐた。赤城山には忠治張りに大熊氏が頑張つてゐる。長谷川傳次郎氏との共著なる「クリスチャニヤ」といふ本も本書と比較の

爲めにN氏に借りて一應眼を通して見た。前傾といふ事が根本を爲してゐる様だが、その理論と實際の寫眞とがチグハグになつてゐる點がないとは云へない。

高橋健次氏(?)は無制動といふ事を可なり以前にいつてゐたと思ふ。

之が又私には解らないのである。素人の私は、一體制動なしでスキーといふものが廻轉するだらうか、とまづかう考へて了ふのだ。然し此の事は馬場氏の著者一二〇頁テンポ・シユウングの項に於て氏自身の見解を明示してゐるから、今その一部を茲に御紹介して見ようと思ふ。即ち

——テンポ・シユウングは、クリスチャニアの完成されたもので(此の點は最近歸朝した小樽高商の高橋次郎氏が明瞭にライネ・クリスチャニアであると述べてゐる——筆者註)シユテム・クリスチャニアの制動角度を段々小さくして行き、遂に無くなつたものである。即ち高速度滑降中に於て、制動姿勢をとることなく、身體のシユウングのみが動力となつて廻轉の動機を與へるものである。けれども、シユテムクリスチャニアの際よりも簡略ではあつても、アプシユテム(半制動)に代るべき豫備動作が行はれることは見逃せ無い。前述の「直滑降よりのシユテム・クリスチャニア」を、斜滑降より行ふものと見ればよいのである。この廻轉は無制動、廻轉と云はれ、スキーがバラレルの儘行はれる故に

「テンポ・バラレル・シユウング」の名稱がある。又身體のシユウングのみで行ふことから「ライネ・クリスチャニア」と呼ぶ者もあるが、從來行はれてゐたものより速度的に、且つ技術的に一層進化を見たものである。

之によると氏のテンポ・シユウングは身體のシユウングのみで行はれる様にも受けとれるが、その解説を見ると體重の移動は明らかに行ふ事になつてゐる。して見ると矢張り純然たる無制動ではない事になるが、此の邊はどうも頭の悪い私にはよく呑み込めない所である。

次に紹介が前に戻る嫌ひがあるが、馬場氏はアールペルガーの新傾向として(此處當りが新スキー術の新なる所以であらう)——從來の腰を引いた深いホットケと、比較的廣いシユニアルを以て、速度を緩めつゝ小さな弧を描いた廻轉は、その姿を消し、それに代るに、出来るだけ雪の抵抗を小にする爲め、狭いシユニアルによつて大きな弧を描き、膝を柔かに鋭く前に出し、腰を前方に入れて、上體はむしろ起して、思ひ切つて全身の前傾を計り、腰と肩のシユウングを利用する圓滑な動作によつて、速力を減することなく、却つて、速力を加へつゝ、廻轉して行く。姿勢は均衡を尊び、動作は旋律的に何んの無理もなしに行はれる。加へて從來輕視され、又無視さへされてゐた制動廻轉及びクリスチャニアの廻

轉前の半制動々作が強調され、其の體重に於ても、從來とは反對に、廻轉内側スキーに乗せかけて平踏附けすることが目立つてゐる。——と述べてゐる。「新スキー術」の寫眞は總て之を裏書きしてゐる様に思へる。之は前出大熊氏の昭和十二年末に出した「クリスチャニア」に出てゐる寫眞と比較して、實に際立つた相違を示してゐると思ふ。

年毎に新スキー術は現はれて來る、スキーが一つの技術であつて見ればそれは當然な事であらう。同じ年に新スキー術が二つも三つも出て來る事もある、之も亦止むを得ない。小島氏が云つた様に劍道に柳生流や眞影流がある如く、スキーに馬場流大熊流、高橋流、さては京都派などといふものが存在するのは當然である。寧ろこれ等いくつかの流派があつてこそ進歩があり、向上があるのである。吾々は何もレイサーになる爲めにスキーをやつてゐるのではないから、特に何々流にこだはる必要は決してないと思ふ。テンポ・シユウングであらうとケルバー・シユウングであらうと、安全に無理なく滑降が出来ればよいのであつて、其の目的に適ふべき色々の要素を新しいスキー術から汲みとつて行けばよいのだ。或る意味から云つて、テンポ・シユウングを眞似るだけでいいよ

速力が増して行つて了つたのでは、山では全く收拾のつかない事になり、同時に又危険でもある。吾々は

唯その優れたる理論を理解し、山岳スキーに採り入れ得る部分をば適當に採り入れて行けばそれで事足りるのではないかと思ふ。

兎もあれ氏の著者には學ぶべき幾多の點を發見する事が出来る。然し此の間ある會合の席上で廻轉の弧と身體の方向は常に圓と切線の關係にあるべきだ、と云つてゐた人があつたが此の點については尙馬場氏の考へを聞きたいものだと思つてゐる。

最後に連續寫眞の事であるが、あれはもつと明瞭に撮して貰ひたい、左右いづれの足か不明瞭な場合が往々にしてあるからである。そして連續寫眞の場合の説明は、その胸毎に要領よくした方がよい。私の様なものは文章を読んで寫眞を見ると、もうその説明は忘れて居り、寫眞を見て之は文章のどこに當るのかといふ事になると見當がつかなくなる場合が多い。個々の説明は矢張りその胸毎にあつた方が便利の様である。

雪 線 第十四號

十三年九月二十日 大阪商大山
岳部發行 菊判一三〇頁

本書は大阪商大山岳部の、昭和十二年六月より十三年六月に至る活動を経てゐるもので、謄寫版刷ではあるが決して閑却出来ぬものである。第

一に述べられてゐるのは、十二年夏の潤澤合宿で、此の時潤澤附近の殆ど總ての岩場に、部員の足跡が印せられてをり、又合宿に先立つては、屏風岩のIのルンゼの登攀も行はれてゐる。次に「北鎌生活」の題名の下に積雪期の北鎌尾根登攀が述べられてゐる。十二年夏及秋の綿密な偵察の結果、十二年の冬は槍平小舎を根據として西鎌、千丈澤、北鎌に三つの天幕を設置して北鎌を目指したが、悪天候に災されて僅かに西鎌に天幕を立てたのみで終つた。續く本年三月は前回と同じコースにより、連日の好晴に恵まれて、槍平より直ちに千丈澤にB Cを設け、前進キヤムプは設けずに幕營十日間中B Cより北鎌へ、或は槍平より北鎌を越えてB Cへ、と云ふ具合に此の附近を縦横に登攀したのであつた。報告の纏め方も比較的上手に出来てゐる。戸塚君を中心に優秀なメンバーを擁する同部は、洵に順調な發展を遂げつゝあり、更に今後の活躍を期待する。尚以上の外に紀行として「春の黒部五郎、双六谷縦走」西多紀の岩場」等の留意すべき文章がある。只地圖三葉は共にもう少し詳細を極めてほしく、又前號と同じく寫眞の一葉もないことは甚だもの足りない。

會報(二高山岳會) 三號

十三年十月中旬二高山岳會發行
菊判一三〇頁 謄寫版刷

本書の大部分は、昭和十一年同會によつて設立せられたる、藏王の清溪小屋建設に關係ある記事に費されてゐる。學校山岳部所有の山小屋の維持は豫想外に難かしいものであると、かね／＼聞いてゐるが、先輩現役其の他二高關係者の尊い努力によつて出来た清溪小屋が、長く同會發展の根據であり、優秀な部員を養成する温床であることを祈る。尙同小屋の位置は刈田岳中腹標高約一四二〇米の地點で、東北帝大ヒュッテから程遠からぬ處である。登山記録の大部分は東北の山々に關したものであるが、その中昭和十二年一月の川入口からの飯豊山、同三月の彌平四郎合宿、十年三月の朝日連峰等は注意すべきものであらう。山岳部々報としての本書にはまだ、改良せらるべき多くの點があり、學校山岳部としても東北の山々を舞臺として、今後益々活躍發展あらんことを祈る。

わらち 第四號

十三年十月二十日 松本高等學校山岳部發行 菊判一〇〇頁

久しく休刊されてゐた松高の「わらち」が新らしく刊行された。本書の内容中先づ第一に位するは、古くから同部と因縁淺からざる且又最近の現役諸氏が最も親んでゐる穂高奥又白谷奥壁登攀の報告である。近頃奥又白がかなり有名になつてゐる

が、奥又白の奥壁を全般的に説明したものは、先年矢張り松高の先輩たる今井田氏が「山と溪谷」に書かれたものゝ、他には餘りない様だ。(去年發行された慈惠醫大高山岳部の「ヨツホ」三號には奥、中、下又白谷の貴重な報告があるが、奥壁に就いては餘り觸れられてない。)この意味に於て本書の價値は洵に大きいと思ふ。本書に述べられてゐる前穂高東壁、北尾根第四峰側壁をはじめ、奥又白の池を中心とした岩壁、岩稜等はこれの三、四年間松高の現役達の最も良き道場であり、穂高に於て、おそくは日本に於て最も困難な岩登の種々のルートが(積雪期を除いて)同部員によつて登攀せられた。只岩壁、岩稜の説明方法は餘り賢明なものとは云へない。一體岩壁のルートは文章で説明することが非常に難かしく、寫眞かスケッチに點線、符號入りで説明するのが一番解りいゝ。此の點甚だ惜しいと思ふ。次に「積雪期に於ける露營」の一文があり雪上幕營露營の種々なる經驗を纏めてゐる。又記録欄にも仲々參考すべき登攀が多い。松高の現役達はその地理的位置を利用して、高校三年間とは思へない位に、或はヴァリエーションルート登攀に、或は雪上露營に捲まざる努力を重ね、本書中には處々に所謂シュミットイズムとも云はるべき旺盛な登高精神が見られる。が何か餘りにも猪突的なものを感じ、着實性を缺いた處がないでもない。學

生登山者は勇敢でなくてはならないが、暴舉を敢てしてはならないと云はれてゐる。益々自重の上大成されたい。尙本書で感したことがあるが、今少し從來の文獻の参照、語句の統一、記述方法の如きものを併せ考へたら更に良いものが出来たであらうし、又用語も自分達仲間間のスラングが少し鼻につきすぎと思ふ。寫眞も奥又白に關するものがもつとほしかつた。とまれ奥又白奥壁の登攀は記憶せらるべきものであらう。

紫岳 第八號

十三年十一月二十日 静岡高嶺山岳部發行 菊判六十五頁

三四年前から順に頭角を表はしてきた靜高山岳部の過去一ケ年の報告である。最近同部で注目されることは、同部が過去に於て採用してきた主として南アルプスに於ける縦走主義的な、又分散的な登山から、より困難な山々を目指しての高度の登攀能力擴充と、全體主義的登山への、意識的な移行であらう。之は同部の先輩たる森山君等が同部にのこしたる土産で、同部員も亦之を信條として鋭意練磨してゐる様に思はれる。が全體主義的登山と云ふ方、向は一應正しく且變らなくとも、その時その時の部員の質、環境等によつて、その理想に達すべき、又達せしむべき方法は常に同じ様にはあり得ない。スミースにいくときも、いかぬときも

ある。この邊のことを考慮に入れて焦せらずに、進めたい。本書記録中留意すべきものは、本年三月南アルプス北澤小屋を根據とし、甲斐駒六方石に前進キヤムプを設けて、甲斐駒、鋸に登攀したことであらうが、後半の白峰北岳の計畫が種々の事情で頓座をきたしたのは惜しい。尙夏の潤澤合宿、二月の富士の幕營等三月の計畫への準備として、一貫した精神の見られるのを嬉しく思ふ。「紫岳」そのものとしては前號、前々號に比べ頁數も薄くなつてゐるが、山岳部の報告として定期的に年々刊行するのは決して無駄ではなくこの方法を繼續されたい。以上 (望月達夫記)

昭和十三年十一月卅日 出版地圖目錄

五萬分一地形圖 修正	名古屋號 十五號	水口 一面
五萬分一朝鮮地形圖 修正	春川號 五號	春川 一面
順天號 一號	丹城 一面	
洪城號 二號	青陽 一面	
義州號 七號	義州 一面	
安州號 九號	龜城 一面	
二萬五千分一都市近郊圖 新版	久留米近郊	一面
五萬分一都市近郊圖 新版	久留米近郊	一面



◆會員通信◆

大同 便り

大變御無沙汰して居ります。

御健在のことは毎度頂く會報に依つて萬々承知して居りますので、大人不相變あばれとるワイと安心してゐるわけです。

御蔭を以て出征以來心憎い程健康に恵まれ感冒一つひかず軍醫さんを歎かせてゐる次第で矢張り山で鍛へスキーで磨いた身體はちがふもので登山こそ最も優秀なる國防スポーツだと我田に引水してゐます。

先般來新聞にも出てゐた五臺山地区の紅軍討伐に出動してゐまして最近歸同したところです。切角五臺山は新雪で御化粧して小生を歓迎してくれたのに目的が違ふもんだから指をくはへて初雪に耀く靈峯を仰いだだけで登れなかつたのは何といつても残念でした。

山そのものはのつぱら棒な奴の如くたまりで仙丈とか間の岳てな峯を思

ひ出させるのですが、支那側の測量に誤りがないとすれば三〇〇〇米を越へるピークが翠峯(三二〇二米)望海峯(三六七七米或は三一四〇米とある)を始め若干あり二八〇〇米以上のもの更に數個あつていさゝか登高慾をそゝられました。謂はんや「〇〇部隊及ヒ〇〇部隊ハ〇〇日中ニ〇〇ニ進出スヘキ」〇〇部隊ト協力スヘク本日ヨリ行動シ望海峯ヲ占領スル管ナリ」なんていふ情報飛來するに於てをやです。恰度十月の中頃でした。小生は頂の雪を眺めつゝ實の山に入り乍らと切齒扼腕したことでした。

共產軍もさん／＼にやられて逃げてしまつた様ですから今後微力なるゲリラ戦が展開される位のもので我々アルビニストの領土となる日はもう遠くはないでせう。太原の方からも樂に入れますが大同と太原の間に雁門關を越えるパスが開通する様になれば大同から登山口まで五日を要しない様になるでせう。

南方の臺懷鎮といふ部落も五臺の中心になつてゐますが北の方沙河鎮といふ處から入るコースも面白い様です。テクニクを要する様な山岳ではありませんから積雪期(十一月末から四月末)に縦走でもやれば興味がありませう。

然しこの附近から京城帝大の成功した小五臺山方面へかけては面白い山が澤山あります。何れにしても、こんなに澤山の山

が我々の足許に轉げこんで來たことは有難いことで、山岳人は此意味に於ても皇軍將士の前に感謝する必要があると信じます。事變勃發の當初太原を目指す板垣兵團がこの山岳地帯に於て如何に困苦と闘ひつゝ前進したかと云ふ事實を我々は今度如實に知ることが出來思はず眼頭を熱くしたものです。冬山のシーズンを迎へ御自愛御健闘を祈ります。

先は御禮かた／＼(山岳と會報の)近況御報告まで、草々。
十一月三日の佳日
大同にて
吉澤 渡邊 公平

日本山岳會への希望

日本山岳會位地方會員にとつて馬鹿らしい會はない。東京附近の者は會に備付の圖書も讀む事も出來れば總會、集會にも參會する事が出来る本會員であるからとて鐵道の割引があるでもなし、せめて山の用品でも割引をいつかの會報で言はれた方があつたやうに覺えてゐる。徒らに日本山岳界最高標準機關をもつて任じ高く止つてゐるやうでは次第に會員數も減り衰微するのみである。

明治三十九年に本會が設立されて以來年々衰ふ事三十年、一體何をして來たのか、餘り大した事もなかつたやうである。

山岳會には山岳會としてのなすべき仕事があるのではないか？ 又な

前にもいつたやうに日本山岳會の何んであるかも知らない人が多い事は實に吾々として残念な事である。何故に知られないかといふ點を考へて見るに、一つの理由がある。それは會が何にも事業をしないからである。一般に少しも働きかけて行かないといふ點である。凡そ如何なる類ひの會でも事業をなさない會に發展はない。會誌を發行してゐるではないかと言はれるかも知らぬが、會誌や會報位は地方の青年團でも發行してゐる。

會の事業といふ事に就て私は左のやうな考へをもつてゐる。それは、その年度に於て山岳界に功勞のあつた人に、登山獎勵賞、又は山岳賞といつた様なものを日本山岳會が授與するのである。例へば、先人未踏の山を征服した人とか、有益なる山岳書を著した人や、山の遭難者の救助に盡した人などを、土地の會員の報告により、理事會で調査の上適當に賞するのである。方法は色々ある。賞する人員は一年に一人を限定してもよからうし又もつと増してもよいだらう。かくする事によつて、日本山岳會も認められ、山岳界へのよき刺激ともなり活氣を與へる事になるのではないか、何もそれに費用をかけて金などやる必要はない、銅メダルに賞狀位で結構だ。

大體、會の方では會員は増さない方針かも知らない、山男に名譽も必要なければ、一般に知つて貰ふ必要

× × ×

もないといふなればそれ迄の話したが、しかし日常の新聞記事を見ても

日本山岳會がどうした、といふやうな記事を見た人が幾人あるか？ 役員よ、どうしてゐるかと叫び度い。

商賣氣のない理事など幾人居つても結局デクの棒と變る處がない。キヤンプ講習、スキー講習、スキーツアーにしても、いつも鐵道省にお株をとられて平氣である役員の氣持が分らない。何故日本山岳會が主催の許に、スキーツアーやスキー講習をやらないのか、立派なテクニクをもつリーダーも會員中にはあり餘る程ある事と思ふ。しからば鐵道省はよろこんで後援者になつてくれるだらう。

山岳映畫でも撮影して(今の會では夢想も出来ない事なので鐵道省のでも借りて)地方の會員や一般山岳愛好家に見せて欲しい。適當の入場料をとれば決して損失をするやうな事はない。

少しも積極的な仕事をせず日本山岳會なる城に立て籠つて自任し外界を見る智力なく、一般山岳愛好家に、日本に日本山岳會有りと呼びかける意氣ある會員、理事は一人もないのか。

新米のくせに生意氣な、と言ふ事勿れ、それ程氣に入らぬ會なら退會すればよいと言ふ勿れ。退會する位ならいっそ黙つてゐる方がよっぽど頭がいゝといふ事になるのだ。

藤村 泰三

漢口より

夏去り、秋なく冬となる。中支長江、懸軍百里、大別の山岳戦は又格別の體驗、一氣に漢口に突入せるも見事なる敵の退却振りに力抜け申候故郷の山々、信飛の山々の冬の訪れを想ひ、漢口の古琴臺に登り來し方を望み申し候。岳州の追撃戦より歸漢して思ひ出のまゝに陣中便りを亂筆にまかせて書きまくり申候。

十一月廿日
中支漢口稻葉部隊本部
北田 正三

中央大學山岳會の計畫

拜啓
當部冬期登山計畫を左の如く決しましたから御通知申し上げます。

第一班 十二月廿五日—一月三日
黑菱スキー合宿

第二班 一月四日—八日
唐松、五龍岳、新人養成を目的とす。

第三班 一月十日—十六日
穂高岳川生活

隊員 リーダー 紀伊 憲輔
永井 憲治
石井、紀伊 以上
敬具

陣中クリームの祕法公開

最近兵隊さんから陣中アイスクリームの製法を教はり毎晩チビリ〜とやつてゐます。餘り美味いので自分獨りで楽しむのもどうかと思ひ會報紙上をかりて岳人諸君に御紹介します。ミルクキャラメルが唯一の材料、一箱あれば宜しい。飯盒の蓋にお湯を入れてそれに一箱分(十錢の奴)をぶちこんで煮ます。若干の砂糖を加えれば更に佳、ドロ〜になつた奴をヒユツテなりテントの外へ置いておく。半時間もすれば立派なアイスクリームが出現、風味まことに珍重すべきものです。尤も餘り温度が高くなり駄目ですがマイナス七、八度より降れば大丈夫でせう。

これはアイスクリームぢやないと云ふ方があればシャーベットとでもしておいて下さい。もとよりぜいたくな方のお口には合ひません。

といふ様な譯です。貴下も早速お試しを乞ふ。いよ〜シーズン來ですが作戦計畫は出來上つたですか、小生は今回でシーズンを邁すること既に二回、優秀なる技術?の退歩することを憂えてゐます。

尙小生のアドレスは左記の如く變更になりました。之もちよつと會報の方へお知らせ致します。では良きお正月とスキー行を。 Ski Hell!

北支派遣後宮部隊氣付
吉岡部隊 渡邊 公平
十二月十日



會務報告

新理事選任報告

本年度理事改選に際し、改選せらるべき理事五名に對し役員總會から同数の理事候補者を推薦致し十二月

中會員各位に御通知申上げ各位より候補者推薦を御待申して居りました處締切日たる十二月十五日迄に御推薦の向無之、改選すべき理事の數と同數と相成りました。

從て義に役員總會の推薦致しました五名の理事候補者は、會則第十二條並に細則二の(ト)により投票を行はすして當選、本年一月より就任せらるゝ事に決定しました。

新任の藤島敏男、三田幸夫、額田敏、水野祥太郎、塚本繁松の五氏は何れも山には深い經驗を有する方々で本會今後の活躍見るべきものありと信じます。何卒會員各位に於かれましては倍舊の御支持御後援を賜はらん事を懇願致す次第であります。

昭和十四年一月
日本山岳會役員總會
會員各位殿

十二月定例理事會

十二月二十日 午後七時虎ノ門本會事務所に於て
出席者 鳥山、茨木、藤島、野口
中司、吉澤

一、理事更迭に關する件
來年度理事は結局理事會推薦の前記五氏に決定となる。早川前理事の補缺選任は當分之を爲さず。

一、「山岳」第三十三第三二號編輯報告の件 一應の報告ありたる後第三十四年第一號の豫定發表あり。

黒部奥山廻り(Ⅲ) 中島正文
ナンゴット(Ⅱ) 立教大學
冬の木曾駒 八 高

奥又白谷の報告 東京商大
カラコラム探險史 (吉澤一郎
カラコラム 郎

ノウメンクレイチャア 望月達夫
一、圖書整理に關する件
紀行、案内、隨筆、技術學術研究、其他、に分類、事務所の鳥山さんにより大半整理済(擔當者野口理事)

一、新入會員詮衡の件
以上

昭和十三年度會員大會
十二月十四日午後七時日本橋商工クラブビルに於て開催

時間の都合に依り横山健堂氏の御講演よりはじめた。幕末維新の探險家とし又隠れたる勤王家として令名高き「松浦武四郎」に關する横山氏の研究は已に定評ある所、約二時間

に亘つて遺著を傾けられた御講演は私達をして時間の経過を全く忘れしめずにはおかなかつた。曾孫に當る松浦武彦氏もわざわざ會の爲めに御出席になつて御持参下さつた種々の参考資料につき御説明になつた。武四郎氏がアイヌ人を僅かに四、五名しか伴はずに北海道や樺太の奥地に踏込んで實測された其等の地圖は全く驚異に値するもの許りである。

此の御講演は何とか纏めて「山岳」誌上に御發表願ひたいものと思ふ。

九時頃から黒田孝雄氏により會務、會計の報告説明あり、滿場異議なく承認可決、本年度會員大會の幕を閉じた。

出席者

茨木、酒井、加藤、小島、冠、吉田、高頭、木村(鏡)、櫻井、武田、中村、吉澤、塚本、福田、望月、黒田(孝)、鳥山、笹谷、藤島、中司、三崎、佐藤、他に横山、松浦の二氏
合計 二十四名

代表者變更

喜瀬 義章 八幡製鐵所山岳會

退會者

(一一五二) 東京市 宮地 貞顯
(一一三一) 兵庫縣 塚本 永亮

會員計報

(八五六) 古谷孝一氏中支に於て戰病死せり、本會は茲に謹んで哀悼の意を表す。

關西支部來室者報告

月別	會員	會員外	會議		計
			回数	人員	
11月	49	46	4	63	158
前月比較	7増	3増	0	3増	13増

寄贈圖書

J. Norman Collier 氏作 Alps

運動場及運動公園 厚生省體力局殿

Untrodden Peaks and Unfrequented

Valleys by Amelia B. Edwards.

Travels through the Alps

by James D. Forbes.

Climbing in the Himalayas

by William Martin Conway

Muirhead's Switzerland with Cham-

onix and the Italian Lakes.

Muirhead's The French Alps.

以上五冊 塚本永亮氏

岩手山案内圖 盛岡高等農林學校殿

關西學生聯盟時報別刷(カルステン

ツ峰登山小史) 安江安宣氏

編輯室より

色々の仕事が輻輳して稍々悲鳴の形。一月は悠びりしたので早めにしました。附録の地圖御役に立てば幸です。加納一郎氏よりの御忠言多謝、それにして近頃關西方面よりの寄稿なし、せいゝ御送りなす。

昭和十三年十二月二十五日印刷
昭和十三年十二月二十六日發行

東京市大森區堤方町六一五

發行兼編輯者 吉澤 一郎

東京市芝區平町(不二屋ビル)

發行所 日本山岳會

電話芝四三二一六四九

振替東京四八二九

東京市芝區濱松町一丁目十三番地

印刷者 植田 庄助

「山の憶ひ出」出づ

明治、大正、昭和をつらぬく日本山岳界の大先輩木暮先生の山旅四十年間の膨大な記録。その上巻が「出づ」出た、下巻もまことに出やうとしてゐる。装幀は吉岡堅二氏、兩巻とも四六大型豪華版であつて各六百頁、定價は三圓五十錢宛である。

「山の憶ひ出」は最初の豫定より二倍の大増刷をしなければならなくなつた。この倉然たる申込殺到に應じて著者は新たに百餘枚の「書卸ろし原稿」を完成され、刊行者は豫告よりも百頁の大増頁と定價の一割引下げを行つた。この事は、如何に本書が各方面から根強く廣く渴仰されてゐたかの證左になるが、又何人がして本書の初版こそ、實費頒布の線に沿つてゐる良心的出版たる事をお認めになると思ふ。

これは木暮先生の山岳に關する處女出版である。今迄生るべくして生れなかつたその由來を、今先生の「序」から此處に引用して見やう。

十數年來折にふれては、友人の誰彼から、今迄に書いたものを纏めて本にし給へ、と勧められたり、又五六の書肆からも、知人を介して、出版を懇進された。しかし本に纏めやうといふ考は全くなかつた。で、其都度書肆には固く辭り、友人には生返事をしてゐたのであつた。

有難いことに、友人はそれで済んでゐた。けれども書肆の中には、そ

れ丈の斷り方では容易に承知して呉れない者もあつて、押問答を打ち切る爲には、止むなく其理由を話さなければならなかつた。それを今こゝに述べることは、無用の繰言に過ぎないであらう。なぜならば、思ひも寄らず、全く思ひも寄らずその本が出版される運びとなつたのであるから……中略……

生れる前から、いつも生まれることを、ひそかに恐れてゐたこの本。それが親しい人々の力を借りて遂に生れた。私の不安な氣持をよよく知つてゐる老友茨木君は「今更、君の書いた古いものを讀んで、どうしよう、こゝろしやうといふ者もあるまい、君のファンだよ、喜ぶのは」と慰めてくれた。あゝ、それならば私もほつと安心して息をつくことが出来る。

序と題して、序文は書かずに、出版の由來に始終してしまつた。この本では、しかし、その方が必要であらうと思はれたからである。

刊行者は斯くして、如何なる運命のめぐり合せか、遂に先生の出版者の名譽を獲得する事が出来た。その名譽に對しても、全く出版者としての責任を深く感じてゐる次第である。

愛蔵版は既に半數以上の申込があるから殘部の配本は勝手乍ら申込先着順にして戴きたい。